

# 「学校を取り巻く教育課題」の認識について（教育行政学を学ぶ学生と教育実習を終えた学生を比較して）

著者	原 幸範
雑誌名	久留米工業大学研究報告
号	41
ページ	118-128
発行年	2019-03-18
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1503/00000259/">http://id.nii.ac.jp/1503/00000259/</a>



〔論 文〕

# 「学校を取り巻く教育課題」の認識について

（教育行政学を学ぶ学生と教育実習を終えた学生を比較して）

原 幸範<sup>\*1</sup>

## Understanding Educational Problems in Schools

(Compare second-year students who are learning local board of education with fourth-year students who had had teaching practice for several weeks.)

Yukinori HARA<sup>\*1</sup>

### Abstract

Are there gaps of the understanding and approaching of solution about educational problem between second-year students to fourth-year students? (Second-year students are learning local board of education to become a teacher. Fourth-year students had had teaching practice for several weeks.) How do these two groups of education students about such issues? The problems bullying, Teacher overwork, Guidance of club activities, Communication with parents, and so on. This paper aims to ascertain the degree of interest in the resolution of the above topics in students desiring to become educators in those pursuing a teacher's license.

As a result of the investigation, second-year students felt prominently concerned about five features: ① bullying problem in school, ② school refusal, ③ various humanity, ④ home education, and ⑤ teachers being overworked. In contrast, fourth-year students were found to take keen interest in following four aspects: ① the anxiety that accrues from the long working hours of teachers, ② the difficulties in guiding students who are affected by bullying in school, ③ home education, and ④ education that enhances the moral sense of learners.

Based on the findings, the solutions to these problems were discussed during class lectures. Students were assisted in understanding administrative approaches that they could use in resolving the educational problems they may face at their work places.

**Key Words** : education problems, educational administration, student teacher, teaching practice, teacher overwork, dropout student, hopeless student, underachiever, home education, local board education

### 1. はじめに

教育行政学を学ぶ目的をはっきりさせるために、その講義初回で「今、学校で発生している課題は何か？また、現場ではどのような改善に取り組んでいると思うか？」ということを学生に問いかけることから始めている。つまり、①学校現場における教育活動の現状と課題は何か、②教職員がどのような教育活動をしているのか、③課題解決に向けて学校や教育委員会などの教育関係機関が何をしているのか、④保護者・地域住民と学校教職員との連携はどうなっているのか、などを考察させることを重視している。これらを認識した上で講義に臨むことが教育現場で働くようになったとき必ず役立つと考えたからである。ところが、この調査を続ける過程でいろいろな気づきをもった。それらを記録・分析することによって講義の質を上げ、学生の学習意欲を高めることができるのではないと考えた。

これから、教師を目指して教育実習を体験する学生や少なくとも教員免許だけでも取得しようと考えている学生にとって、学校現場の現状や課題、子供たちの置かれている状況などを理解しておくことは決して無駄ではない。また、課題解決に向けて教職員や教育委員会、地域の関係機関がどのような取組をやっているのかを理解することは大切なことである。そして何より学生自身が使命感をもって教育課題の解決に向けて意欲的・主体的に取り組むことが求められ

---

<sup>\*1</sup> 共通教育科  
平成30年10月25日受理

る。ここに取り上げたいいくつかの課題を深く考えることは、例えば、今後 ICT 機器等が導入されたときの教室での授業改善の工夫や気づきにつながることになる。また、その後の教育行政学の講義で討議したことが、例えば、通信機器の発達で子供たちの人間関係がどのように変化していくのかを予測することができるし、そのときの生徒指導や教育相談の在り方を考えるヒントになる。

さらにこれに加えて、学生に「各項目の解決に向けて主体的に取り組むべきところはどこか？」と尋ねたところ「3. いじめ問題」では教師だけでなく、地域関係機関や教育行政がやるべきだと答えていた。そして、「11. 教師の過重労働、研修制度」では教育行政がもっと主体的に取り組むべきだと答えている。そんな学生たちの「どうにかして解決策を探ろう。」とする姿に大きな期待をもった。

## 2. 本学における「教育実習参加状況と教員免許取得状況」について

本学における教師を目指す学生の教育実習状況と免許取得状況を示しておきたい。（教員免許取得では複数教科取得を含む）

教育実習参加状況と教員免許取得状況

教育実習参加状況	平成27年度	平成28年度	平成29年度
教育実習 参加人数	15名	35名	33名
実習科目（数学・理科・情報）	13	34	31
実習科目（工業）	2	1	2
特例措置による免許取得数	9名	6名	8名
教員免許取得状況	平成27年度（24名）	平成28年度（41名）	平成29年度（41名）
中学校一種（数学）	12	27	21
中学校一種（理科）	6	17	17
高校一種（数学）	11	23	19
高校一種（理科）	5	17	10
高校一種（情報）	3	5	10
高校一種（工業）	11	7	10
中学校一種 合計	18	44	38
高校一種 合計	30	52	49

これを見ると、教育創造工学科及び情報ネットワーク工学科では、すべての学生が教育実習を体験して免許の取得を果たしている。一方、これ以外の機械システム工学科・交通機械工学科・建築・設備工学科では、その多くが特例措置（教育実習をしなくても免許取得が可能）で免許を取得している。つまり、工業の免許取得の場合、平成29年度では10名中8名は特例措置であり、教育実習を体験したのは2名のみである。この教育実習を終えた4年生は「11. 教師の過重労働、教師の健康問題」に高い関心を示していた。その理由として考えられるのは、実習中の教員の仕事ぶりを間近にみて、現場の厳しさや教員としての自分の資質・能力を推し量ったためであろう。

## 3. 教育現場における課題の意味に関する認識の違い

平成29年度のアンケート調査では、2年生65名に対して教育課題として掲げた各項目の意味をどこまで把握しているのかを知るために次のような質問紙（自由記述）を実施した。課題に対する認識の違いや多様な感じ方があって面白い。

### ①「いじめ問題」についてどう思いますか？

- テレビや新聞など報道されているのを聞いて、学校がなぜいじめを隠すのか。怒りがこみあげてくる。
- 自分もいじめられた経験があるので、そんな生徒の気持ちを分ってやりたい。
- いじめは絶対になくならないと思っているので解決は難しい。
- いじめられた者にしか、その気持ちは分からない。
- 先生になって、いじめのない楽しい学級をつくらうと思っています。

### ②「落ちこぼれ」とはどのようなことですか？

- 最低限の知識すら身につけていないために、授業についていけない生徒

- 成績が平均より大幅に低い生徒、または、ある一定以下の成績（欠点など）をとる生徒
  - ものすごく成績の悪い生徒や基本的なことも理解できない生徒
  - 勉強嫌いの生徒であり、学校を欠席したりするので落ちこぼれになる。
  - 小学校や中学校のときから授業についていけなかった生徒
  - 理解するまでに時間がかかるためにどんどん遅れていく生徒。また、授業スピードについていけない生徒
  - 学年に応じて最低限理解していなければならないレベルの勉強を覚えていないままに進級した生徒
- ③「浮きこぼれ（吹きこぼし）」とはどのようなことですか？
- すでに知っているのに、授業を退屈に思ったり、ヒマに感じたりしている生徒
  - 塾などで先のことまでやっている生徒が、みんなに合わせるために待たないといけない。
  - 塾で勉強していて知っているために、学校の授業をまじめに受けない生徒
  - 塾などに通っているのに、学級で定めている目標ラインの上限を越えていて、暇にしている生徒
  - 成績が上位で授業レベルが低く、モチベーションが下がり、まじめに授業を受けない生徒
  - 周囲の勉強の輪からはみ出している生徒

#### 4. アンケート調査の概要

- (1) 平成28～30年度の3年間、教育行政学を受講する学生2年生と教育実習を終えた4年生を対象にアンケートを実施した。
- ア. 平成28年度      2年生90名（教員免許取得を希望32名、教育実習を希望58名）・・・〈図1～2〉  
                            4年生33名（教育創造工学科31名、その他2名）・・・〈図3〉
- イ. 平成29年度      2年生65名（教員免許取得を希望23名、教育実習を希望42名）・・・〈図4～5〉  
                            4年生26名（教育創造工学科22名、その他4名）・・・〈図6〉
- ウ. 平成30年度      2年生65名（教員免許取得を希望23名、教育実習を希望42名）・・・〈図7～8〉  
                            4年生26名（教育創造工学科22名、その他4名）・・・〈図9〉
- (2) アンケート調査の内容は次の通りである。

『現代教育における課題 ～学校を取り巻く教育環境～』に関するアンケート

1. 下記のキーワードについて、関心があるものの番号を○で囲んでください。（複数選択 可）
2. あなたが選んだ下記の「キーワード」について、もっとも関心のあるものを3つ選択してください。  
A. 最も関心がある（ ）      B. 2番目に関心（ ）      C. 3番目に関心（ ）
3. 下記以外で考えられる課題があれば書いてください。

〈選択項目〉

1. 個性尊重教育と画一化教育（落ちこぼれ、吹きこぼしなど）
2. 受験競争や学歴主義など
3. いじめ問題
4. 校内暴力（生徒と生徒、教師と生徒）
5. 差別や偏見（男女差別、人種差別など）
6. インクルーシブ教育（身体障害や発達障害等に対処）
7. 青少年の自殺問題
8. 不登校問題
9. 資格取得と生涯学習
10. 教科書検定制度、副教材等問題
11. 教師の過重労働、教師の健康問題
12. 教師力の低下と研修制度
13. 学校組織の機能不全
14. 家庭の所得格差と学力差

15. 少年非行と経済的理由
16. 保護者や地域の教育力低下
17. 家庭教育の崩壊（躾や礼儀など）
18. 心の教育、豊かな人間性の育成
19. 小中学生の規範意識の低下
20. 教育費（授業料、補習料、補助教材費、行事関係の費用など）

## 5. アンケート調査の集計結果 及び 注目すべき点に関する解説

表示等について 「2年生A.」とは、教員免許取得を希望しているが現時点では教育実習は考えていない学生。

「2年生B.」とは、教育実習を希望して、将来教職を志望している学生。

「4年生」とは、教育実習を終えて、教員免許取得が決定した学生。（教職を志望しない学生も含む。）

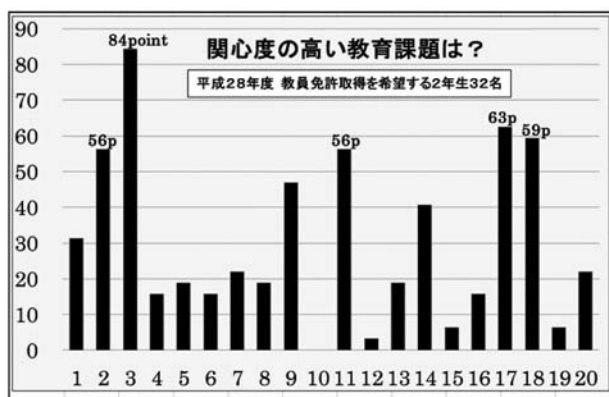
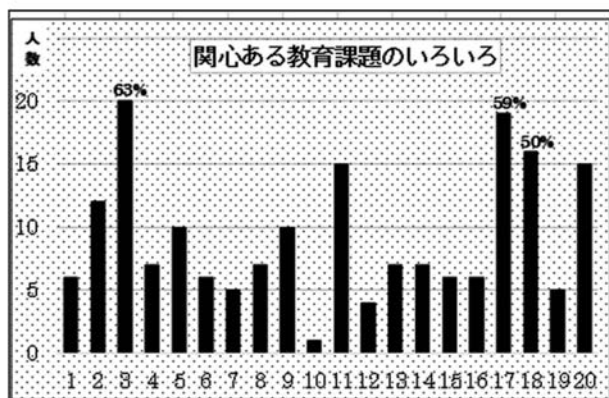
「ア. 関心のある教育課題のいろいろ」では、単純に○で囲まれた個数を集計したものである。

表示の割合(%)は、調査人数に対する割合である。 $(\text{○の個数} / \text{調査人数}) \times 100\%$

「イ. 関心度の高い教育課題は？」では、「最も高い」を選択している場合は3点を、「2番目に高い」を選択している場合は2点を、「3番目に高い」を選択している場合は1点として各項目別に集計した。

それを調査人数に対する割合として $(\text{点数} / \text{調査人数}) \times 100$ のpoint表示とした。

なお、「横軸の各項目の番号」については、上記の〈選択項目〉に対応している。



〈図1〉現代教育における課題(H28年9月調査2年生A. 32名)

〈図1〉の調査対象は2年生A.の32名である。

最も関心が高いのは、「3. いじめ問題」20名であり、調査対象の63%、つまり、8名のうち5名が関心をもつ。

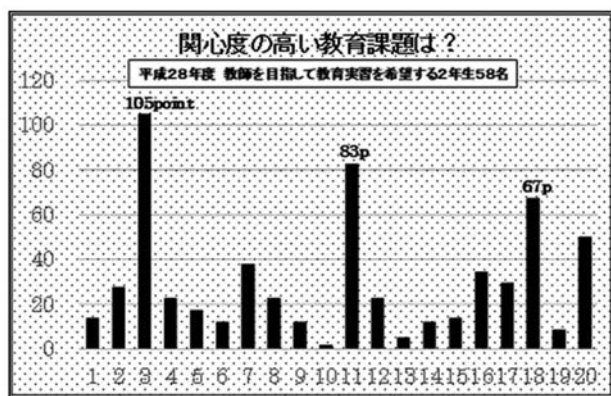
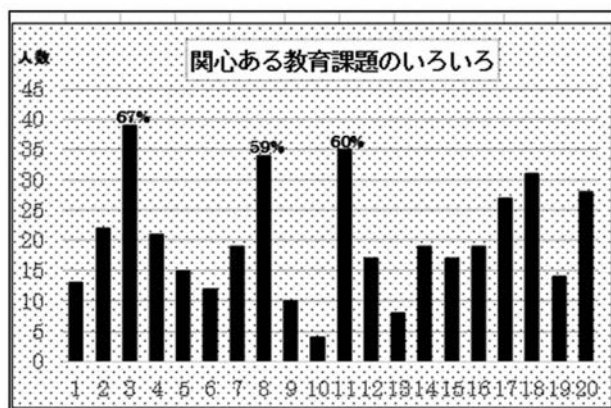
次に関心があるのは、「17. 家庭教育(躾や礼儀など)」59%の19名である。そして、「18. 心の教育、豊かな人間性の育成」が50%であり、調査対象の半数が関心を示している。学生が『教育を通して人間関係や道徳性、心の問題』を重視していることが伺える。

一方、教師に関する「11. 教師の過重労働、教師の健康問題」47%や経済面の「20. 教育費」47%が次に続く。関心度については、「3. いじめ問題」が圧倒的に高い。

そして、「17. 家庭教育(躾や礼儀など)」63point及び「18. 心の教育、豊かな人間性の育成」59pointとなる。これに並んで、「2. 受験競争や学歴主義など」56pointや「11. 教師の過重労働、教師の健康問題」56pointとなっている。これは彼らが経験してきた受験競争や学歴主義に対する関心度が高いことを示している。そしてやはり、教師の健康問題にも関心があることがわかる。

一方、「20. 教育費」について関心度は高くなっていないが、これは上図の「関心ある教育課題のいろいろ」の上位3項目に入らなかったためである。むしろ、「9. 資格取得と生涯学習」や「14. 家庭の所得格差と学力差」の方に関心度が集まっている。また、「10. 教科書検定制度、副教材等問題」は全く関心がない。





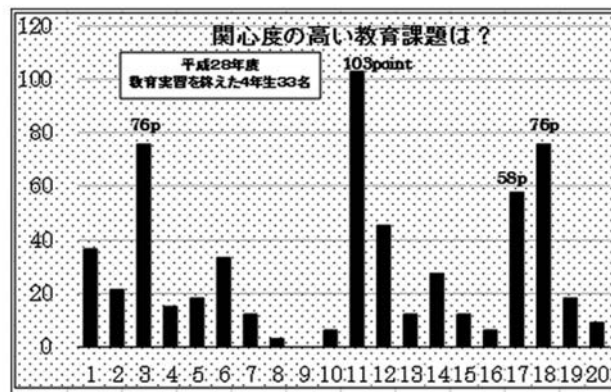
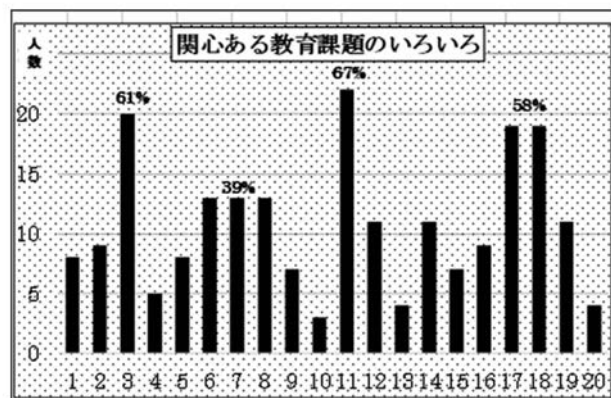
〈図2〉現代教育における課題（H28年9月調査2年生B. 58名）

〈図2〉の調査対象は2年生B. の58名である。

最も関心が高いのは「3. いじめ問題」39名 67%であり、3人のうち2人が関心を示したことになる。関心度では12名が「A. 最も関心がある」を選択している。それだけいじめ問題を大きな社会問題として捉えていることになる。次に関心があるのは、「11. 教師の過重労働、教師の健康問題」35名 60%。そして、「8. 不登校問題」34名 59%となっている。将来教職に就く予定の学生なので教師に関連することが切実な問題となっているようにみえる。ここでの調査対象になっている学生の多くが『いじめられている生徒』や『不登校になっている生徒』に関わりたくて強く考えているようである。教育愛や教師へのあこがれを有する学生が多い。そして、「18. 心の教育、豊かな人間性の育成」31名 53%。及び「20. 教育費」28名 48%。「17. 家庭教育の崩壊（躾や礼儀など）」27名 47%と続いている。

一方、関心度については、「3. いじめ問題」が最も高く105pointになっている。続けて、「11. 教師の過重労働、教師の健康問題」83point及び「18. 心の教育、豊かな人間性の育成」67pointであり、「20. 教育費」50pointとなっている。経済面である教育費に関心がある点に注目したい。

ところが「8. 不登校問題」については、「関心ある」が59%であったものの「関心度」は22pointとかなり低くなっている。また、「17. 家庭教育の崩壊（躾や礼儀など）」についても同様に30pointと関心度は低くなっている。



〈図3〉現代教育における課題（H28年9月調査4年生33名）

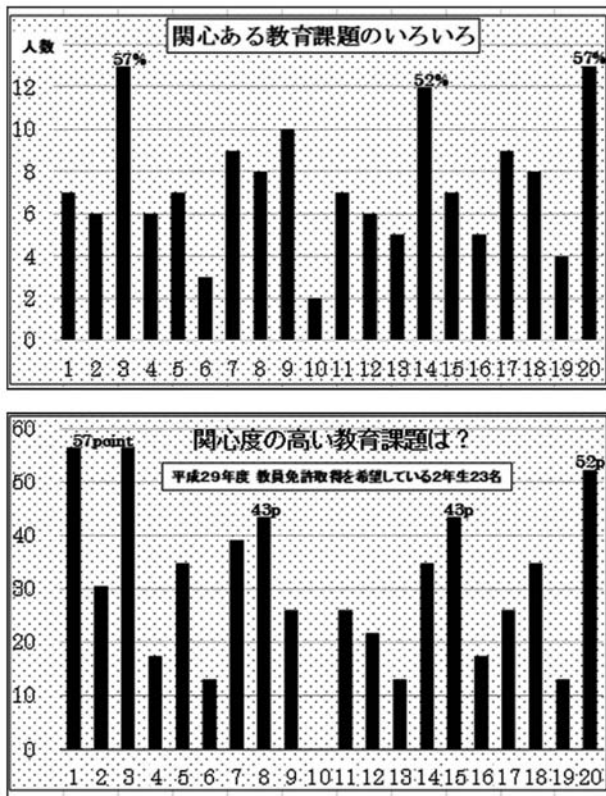
〈図3〉の調査対象は4年生33名である。

「11. 教師の過重労働、教師の健康問題」22名 67%であり、これは3名のうち2名が関心をもっていることになる。そして、関心度では103pointと最も高くなっている。これは明らかに教職の厳しさを痛感したものである。次に関心のある教育課題としては、「3. いじめ問題」20名 61%となっているし、そして、次の2つの項目が19名 58%となっている。すなわち、「17. 家庭教育（躾や礼儀など）」及び「18. 心の教育、豊かな人間性の育成」である。これは教育実習を通して子供たちと触れ合った体験からの実感である。

一方、関心度に注目すると、最も関心度の高い「11. 教師の過重労働、教師の健康問題」に続いて、「3. いじめ問題」及び「18. 心の教育、豊かな人間性の育成」が同じ関心度で76pointとなっている。それに対して「17. 家庭教育（躾や礼儀など）」が58pointであり、「18. 心の教育」よりもかなり低くなっている。同様に「7. 青少年の自殺問題」や「8. 不登校問題」についても関心度がほとんどなくなっている。

「9. 資格取得と生涯学習」には全く関心がない。これを〈図2〉の教育実習を希望する2年生B. と比較すると、「1. 個性尊重教育と画一化教育」と「6. インクルーシブ教育」及び「12. 教師力の低下と研修制度」の関心度が高くなっている。これらは教育実習での体験が大きく影響している。



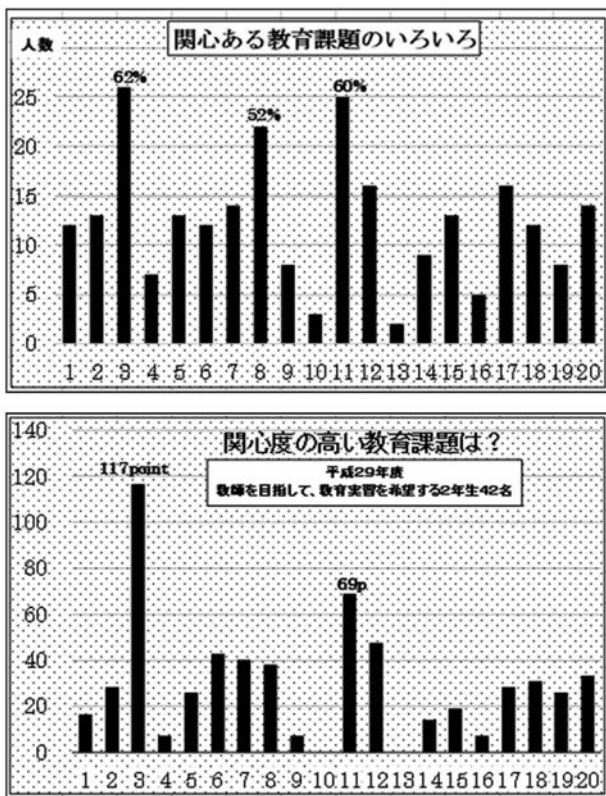


〈図4〉現代教育における課題(H29年9月調査2年生A.23名)

〈図4〉の平成29年度の「教育実習を考えていない2年生A.」の23名である。

「3. いじめ問題」及び「20. 教育費（授業料、補習費、補助教材費、行事関係の費用など）」に多くの関心を示し、ともに57%の13名の学生が関心を示している。次に関心を示しているのは、「14. 家庭の所得格差と学力差」12名 52%であり、続けて、「9. 資格取得と生涯学習」10名 43%である。また、「7. 青少年の自殺問題」及び「17. 家庭教育の崩壊（しつけや礼儀など）」はともに9名 39%である。さらに、「8. 不登校問題」及び「18. 心の教育、豊かな人間性の育成」8名 35%などが続いている。ここで調査した2年生23名はどの項目についても関心を示し、それは関心度に関するデータでも見て取れる。

関心度で最も高いのは次の2つである。「1. 個性尊重教育と画一化教育（落ちこぼれ等）」及び「3. いじめ問題」はいずれも57pointである。次に「20. 教育費（補習料、補助教材費等）」52pointである。引き続き関心度が高くなっているのは、「8. 不登校問題」及び「15. 少年非行と経済的理由」となっていて両方とも43pointとなっている。100 pointを示すほどの極端に高いものはないが、幅広くどれについても関心度が高くなっている。



〈図5〉現代教育における課題(H29年9月調査2年生B.42名)

〈図5〉の調査対象は「教師を志望し、教育実習を希望」している2年生B.の42名である。

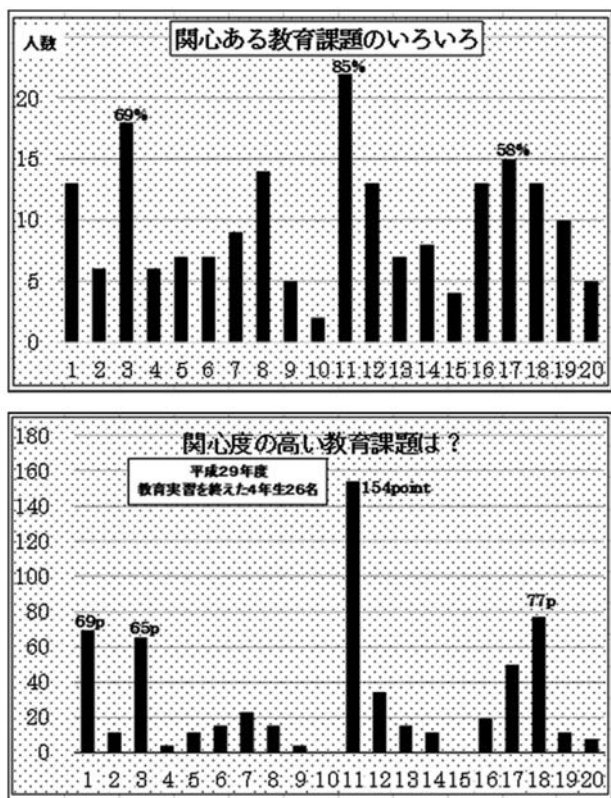
関心ある課題として挙げているのは次の3つである。

「3. いじめ問題」26名 62%であり、「11. 教師の過重労働、教師の健康問題」25名 60%及び「8. 不登校問題」22名 52%となっている。しかし、関心度は群を抜いて、「3. いじめ問題」117pointである。辛うじて、「11. 教師の過重労働、教師の健康問題」69pointが続いている。その他の関心度はほとんど低い。

一方、「10. 教科書検定制度、副教材等問題」及び「13. 学校組織の機能不全」はほとんど関心がない。

また、関心度に関しては「3. いじめ問題」に続いて、「11. 教師の過重労働、教師の健康問題」69point及び「12. 教師力の低下と研修制度」48pointであって、学生の半分程度しか関心度を示しているに過ぎない。引き続き、関心度を示しているのは次の3つである。「6. インクルーシブ教育（身体障害や発達障害等に対処）」と「7. 青少年の自殺問題」及び「8. 不登校問題」である。注目すべきは「8. 不登校問題」の急低下である。逆に関心度が低いものは次の5つである。「4. 校内暴力」や「9. 資格取得と生涯学習」そして、「16. 保護者や地域の教育力低下」などが若干であり、「10. 教科書検定制度、副教材等問題」及び「13. 学校組織の機能不全」は関心度0となっている。





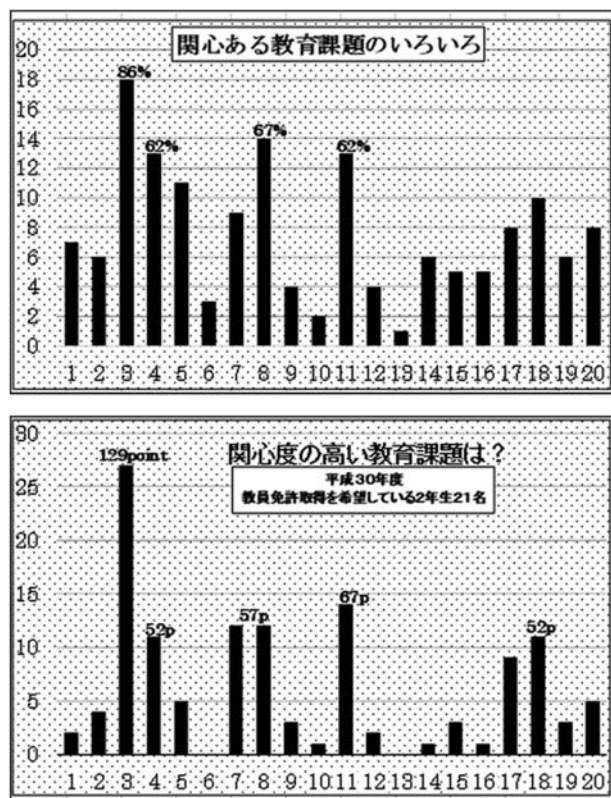
〈図6〉現代教育における課題（H29年9月調査4年生26名）

〈図6〉の調査対象は4年生26名である。

「11. 教師の過重労働、教師の健康問題」22名 85%が関心を示しているが、これは学校現場で実際に教師の仕事の様子を見ての正直な実感であろう。次に関心があるのは「3. いじめ問題」18名 69%であるが、ここでも3名のうち2名が関心を示していることになる。続いて「17. 家庭教育（躾や礼儀など）」15名 58%「8. 不登校問題」14名 54%となっている。

次の3つはすべて13名 50%すなわち、学生の半数が関心をもっている。「1. 個性尊重教育と画一化教育（落ちこぼれなど）」「12. 教師力の低下と研修制度」及び「18. 心の教育、豊かな人間性の育成」である。

一方、関心度について見てみると、「11. 教師の過重労働、教師の健康問題」154point が突出して高い。学生からの生の声にも「15時間以上の長時間勤務で体力が必要だ」とか「生徒一人一人に対応することがとても難しいと感じた」など切実であった。それに続いては「18. 心の教育、豊かな人間性の育成」や「1. 個性尊重教育と画一化教育」及び「3. いじめ問題」などが高い。これとは逆に、次の4つは関心度が殆んどない。「4. 校内暴力（生徒と生徒、教師と生徒）」や「9. 資格取得と生涯学習」そして、「10. 教科書検定制度、副教材等問題」及び「15. 少年非行と経済的理由」である。



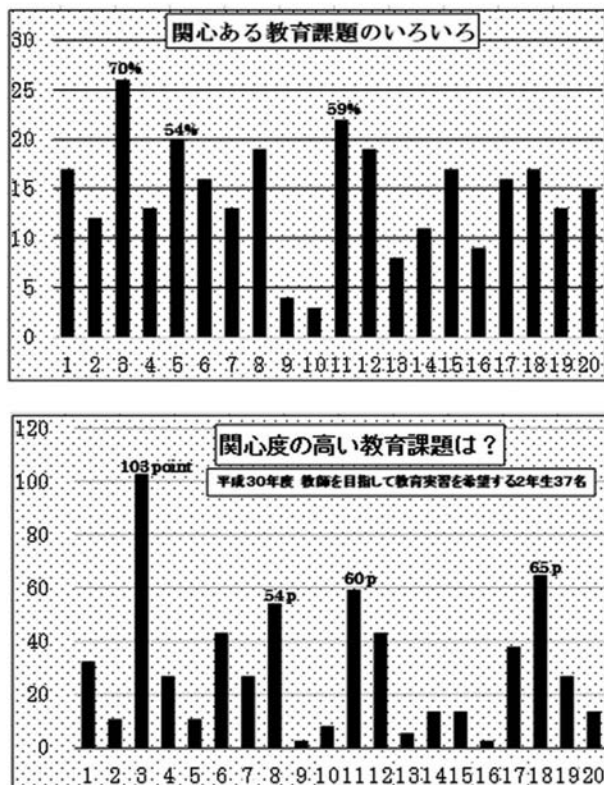
〈図7〉現代教育における課題（H30年9月調査2年生A. 21名）

〈図7〉の調査対象は2年生A. の21名である。

最も関心が高いのは、「3. いじめ問題」18名 86%であるが、これは最近盛んに報道されている「いじめによる中学生の自殺」の報道等がかなり影響している。関心度についても129point と群を抜いて高い。続いて、学生が関心を示しているのは次の3つである。「8. 不登校問題」14名 67%であり、「4. 校内暴力（生徒と生徒、教師と生徒）」13名 62%「11. 教師の過重労働、教師の健康問題」13名 62%であり、これらは調査対象者の半数以上となっている。

一方、関心度については、「3. いじめ問題」に続いて、「11. 教師の過重労働、教師の健康問題」67point や「7. 青少年の自殺問題」及び「8. 不登校問題」57point そして、「4. 校内暴力（生徒と生徒、教師と生徒）」及び「18. 心の教育、豊かな人間性の育成」52point である。この〈図7〉と〈図1〉及び〈図4〉とを比較してみると、いずれも「3. いじめ問題」に対する関心度が高い。それだけ身近な問題であり、解決したいことのようなだ。その他の項目については特に共通性は見いだせない。敢えて挙げれば「18. 心の教育、豊かな人間性の育成」であろうか。しかし、この2つの項目に関連する点は「いじめ問題」も心の問題であり、「豊かな人間性の育成」も心の教育であって、いずれも子供に寄り添った教育に関心が高いことが窺える。



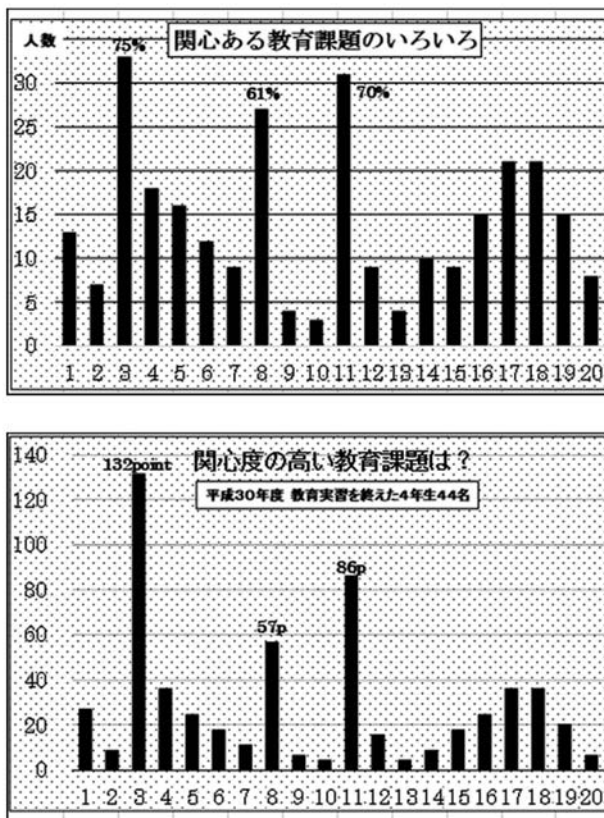


〈図8〉現代教育における課題（H30年9月調査2年生B.37名）

〈図8〉の調査対象は2年生B.の37名である。

ここでもこれまでと同様に、最も関心が高いのは、「3. いじめ問題」26名 70%と3名のうち2名が関心をもち、その関心度は群を抜いて103pointと高い。次に関心を示しているのは、「11. 教師の過重労働、教師の健康問題」22名 59%。そして、「5. 差別や偏見（男女差別、人種差別など）」20名 54%。続いて、「8. 不登校問題（生徒と生徒、教師と生徒）」19名 51%及び「12. 教師力の低下と研修制度」19名 51%である。しかし、この2年生B.グループはすべての項目に関心を示している。この〈図8〉と〈図2：平成28年〉や〈図5：平成29年〉を比較しても同様に、すべての項目に対して関心を示している。これは教師を目指して教育実習を念頭に置いている学生に共通するものであるといえる。さらにこのグループはいずれも「3. いじめ問題」「8. 不登校問題」「11. 教師の過重労働、教師の健康問題」が「関心ある教育課題のいろいろ」の上位を占めている。

さて、左図の関心度については、「3. いじめ問題」に続き、「18. 心の教育、豊かな人間性の育成」65pointと「11. 教師の過重労働、教師の健康問題」60point及び「8. 不登校問題」54pointなどである。しかし、上の「関心ある教育課題のいろいろ」に比べて関心度が著しく低くなっているものは、「5. 差別や偏見」や「15. 少年非行と経済的理由」及び「20. 教育費」である。



〈図9〉現代教育における課題（H30年9月調査4年生44名）

〈図9〉の調査対象者は4年生44名である。

「3. いじめ問題」33名 75%が関心をもっている。実に4名のうち3名が関心を示している。勿論、関心度では圧倒的に高く132pointである。次に関心があるのは、「11. 教師の過重労働、教師の健康問題」31名 70%続けて、「8. 不登校問題」27名 61%となっている。そして、「17. 家庭教育（躾や礼儀など）」21名 48%と「18. 心の教育、豊かな人間性の育成」21名 48%及び「4. 校内暴力」18名 41%となっている。

一方、関心度については、「3. いじめ問題」に続いて、「11. 教師の過重労働、教師の健康問題」86point及び「8. 不登校問題」57pointというようにこれら3つの項目に集中している。

同じ4年生の〈図9〉と〈図3：平成28年〉及び〈図6：平成29年〉を比較すると「8. 不登校問題」について〈図9〉は57pointで関心度が高いけれど、〈図3〉と〈図6〉では、その半分にもなっていない。逆に「18. 心の教育、豊かな人間性育成」について〈図3〉及び〈図6〉では76pointに対して〈図9〉では36pointであってその半分にも満たない。平成30年4年生にとって教師の問題を除いたとき、高い関心度は「3. いじめ問題」と「8. 不登校問題」であって、学校生活で苦しんでいる生徒の心情に関心をもち、その解決を深く考えていることがわかる。

◇ 3年間を総合的に分析し『教育実習を終えた4年生』と『教師を目指し、教育実習を希望する2年生B.』を比較。

(1) 「関心ある」を選択した人数の割合で見ると、(4年生が高い場合＋、2年生が高く、4年生が低い場合－で表示)

ア. 4年生が高いのは「11. 教師の過重労働・健康問題」＋14%、「16. 保護者・地域の教育力」＋14%、「17. 家庭教育の崩壊（躾や礼儀など）」＋11%

イ. 4年生が低く、2年生B.が高いのは「2. 受験競争・学歴主義」－12%、「15. 少年非行」－16%、「20. 教育費」－24%

ウ. 若干の差が生じているのは「18. 心の教育と人間性の育成」＋9%、「19. 規範意識の低下」＋9%、「5. 差別や偏見」－8%であるが、これら以外ではほとんど差はなく同程度の割合である。

これらのことから、4年生のキーワードは「教師、保護者・地域、家庭教育」などが挙げられる。それに対して、2年生のキーワードは「教育費、少年非行、学歴主義」などが挙げられる。

(2) 「関心度」のpoint数を見る。(4年生が高い場合を＋とし、2年生が高く、4年生が低い場合を－で表示)

エ. 4年生が多いのは「11. 教師の過重労働」＋44point、「1. 個性尊重教育・画一化教育」＋23point、「17. 家庭教育（躾や礼儀など）」＋16point

オ. 4年生が少なく、2年生B.が多いのは「20. 教育費」－24point、「7. 青少年の自殺問題」－19point 続けて、「3. いじめ問題」－17point、「8. 不登校問題」－13point、「6. インクルーシブ教育」－11point

カ. これらに続いて若干の差が生じているのは「18. 心の教育と人間性の育成」＋9point、「2. 受験競争や学歴主義」－8pointである。

これから4年生のキーワードは「教師、個性尊重、家庭教育」が挙げられる。それに対して、2年生のキーワードは「教育費、青少年自殺、いじめ、不登校、インクルーシブ教育」などが挙げられる。

◇ (平成28年9月調査2年生B.58名)と(平成30年9月調査4年生44名)は、調査対象となっている学生のほとんどは同じ人物になる。したがって、2年次と4年次の時間的変化の比較を〈図2〉と〈図9〉から考えてみる。

ほとんどの項目で同じ傾向を示していて、2年次と4年次での時間的変化はあまり見られない。違いが見られるのは次の3項目などである。「8. 不登校問題」では、関心をもつ人数は60%ほどで殆ど変わらないが、関心度では2年次が22pointに対して、4年次は57pointと高くなっている。教育現場に臨んでの実感であろう。また「18. 心の教育、豊かな人間性の育成」では、関心をもつ学生はいずれも50%前後であるが、関心度が2年次の67pointから4年次が36pointと半分近くに減少している。もうひとつの「20. 教育費」についても、4年次では関心度7pointと殆どなくなっている。つまり、2年次には半数近くの48%が関心をもっていたけれど、4年次では18%と関心をもつ学生が減っていて、教育費よりも他の項目へ関心が移っている。

ところで、教育課題として20項目以外に考えられる教育課題を自由記述してもらったので、そのいくつかを挙げてみよう。世の中の情報化の流れから、ICT教育に関係するものが目に付くようだ。

1. スマホ・携帯電話によるいじめや仲間外れなどSNS問題がある。
2. ゲーム依存症など夜中までやって、あまり眠らない生徒がいる。
3. SNSなどと視力低下・コミュニケーション能力の低下が気になる。
4. 情報化による「学校外」でのいじめ問題。(情報化社会と差別やいじめ問題)
5. 朝食を取らずに登校する生徒がいる。(子ども食堂とその運営について)
6. 家庭崩壊や家出をした子供たちが暮らしていける施設が必要だ。
7. モンスターペアレントや毒親など保護者に問題がある。
8. 少子化による生徒の減少や学校数減について。
9. 教科書検定制度の内容がよく分からない。
10. タブレットなどが学校に導入されているが、今後どのようなようになるのか心配である。
11. 学校組織の機能不全でどんなことが発生するのか分からない。
12. 性犯罪が多発しているように感じる。また、LGBTといじめ問題がある。
13. 教師の暴力がまだまだなくなっていない。
14. 教師の自殺問題もある。病気で勤務できなくなった先生がいた。
15. 学校の施設・設備の不十分さや不備について



以上のような課題や関心事が書かれていた。ニュース報道で気になったことや日常生活で感じたこと等を詳細に書いていた学生が数名いたが、それはすべて4年生であって教員採用試験で論文試験を経験していた。このような教育課題の解決に向けて熱心に討議し深く考えていた。

## 6. むすび

学校を取り巻く教育環境におけるいろいろな課題を考えることは、教師を目指す学生にとっては勿論のこと、これから社会で活躍する20歳前後の若者たちにとっても大きな影響を与えることができる。特に現代の教育課題を考えることは、彼らが就職して社会で働くときの生活改善への気づきや職業に対する考え方、その意義などを考える機会になる。2030年の日本はどのような社会になっているのだろうか。また、そのとき学校教育はどのように変化しているのだろうか。ひょっとすると授業では教科書ではなくタブレットだけかもしれない。教師だけでなく、教育に携わる多種多様な人が生徒と関わっているかもしれない。生徒数が一層少なくなり、否むしろ、年齢に関係なくいろいろな世代の人が学んでいる状況も想像できる。不安もあれば楽しみでもある。

この調査の分析を通していえることは、どの学年であっても、どの時期においても「いじめ問題」に対する関心が高かったことである。それは彼らのこれまでの生育環境の体験であり、身の回りで発生していた現実であり、絶対に解決したい事柄であったのだろう。そして、このことが教師を目指すきっかけになった学生が半数以上いた。いじめを解決できないまでもそんな生徒に寄り添っていたという学生がいる。勉強が分からないで困っている生徒に丁寧に教えたという学生もいる。不登校になっている生徒のいろんな悩み相談に応じたいという学生がいる。また、授業を通して心の教育を大切にしたいという学生も多量いた。一方、部活動指導を通して全国で活躍できる選手を育てたいという学生もいた。そのためにも、コミュニケーション能力や生徒理解力・生徒指導力、そして学級経営力・集団指導力など「教員として必要な資質・能力」をしっかりと身に付けたいと強く決意している学生を多く見受けることができ、将来への明るい期待がもてた。

一方、教師の過重労働問題や健康問題にも関心が高かった。特に、4年生にとっては身近で切実な問題となっている。たとえ教職に就かなくても何らかの仕事に携わることになるので労働時間や福利厚生についての関心は当然高くなる。彼らが話している様子からその心境が十分に伝わってくる。教育実習では、生徒のときには気づかなかったことを多く発見しているし、学校で先生たちが働いている状況を見て、教職の忙しさや教師の魅力を強く感じている。教師は授業だけでなく、朝の挨拶から掃除や下校指導までいろいろな教育活動があり、さらに学校行事では、そのための準備や会議などそれに付随する仕事次から次に舞い込んでくる。また、休み時間に生徒が話しにすれば対応しなければならないし、加えて放課後の部活動指導もある。それら全てにうまく対応している先生をみて「自分にはできない」と感じた学生も少なからずいた。また、ニュース報道などで過労死問題が取り上げられていることにも大きな影響があるようだ。あるひとりの学生が、実習中に保護者からの苦情に困り果てていた先生の話しをしていた。授業だけでなく、教師には本当にたくさんの仕事があることを痛感したようである。先生には「忍耐力や行動力・実践力、そして体力・健康管理が大切なので心の健康と身体の健康を考えていたいし、ストレス対処法も必要に感じた」という学生もいた。しかし、2年生の場合は少し違った。一般論としての「過重労働問題」としての認識であり「なぜそんな遅くまで仕事するのか、早く帰ればいいじゃない。」という発言をする学生もいた。実際、教師の仕事内容についても授業や部活動指導ぐらいしか把握していないのであって、教職に対する実感が薄い。部活動の顧問を希望しない学生は半数以上いた。休日勤務はできる限りやりたくないという学生も数名いた。むしろ「青少年の自殺問題」や「教育費の高さ」に不満をもっている2年生が目立った。

ところで、2年生に対して次のようなことを尋ねてみた。

「これら教育課題の解決に向けて、どの分野の人々が主体的に取り組むべきと考えるか？ それぞれについて次の4つの中から選んで枠の中に記入せよ。」として、選択肢を次のように示した。

- A：教師や教職員・学校の管理職など
- B：保護者や地域住民などの大人たち
- C：地域の関係機関（医療関係者、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等、警察や法律関係、地域のボランティア）
- D：教育行政（文部科学省、地域の教育委員会など）



その結果が次の〈図10〉である。これをみると「いじめ問題」では、（A教師）と（C地域）が主体的に取り組むべきとして90%以上になっている。（D教育行政）を選択したのは10%にも満たなかった。また「家庭の所得格差と学力差」では、（B保護者）と（C地域）で80%以上になっている。ここでもやはり（D教育行政）を選択したのは20%にもなっていない。このいずれからいえることは、自己責任の色合いが強く反映されている。さらに「小中学生の規範意識の低下」では、（A教師）が55%と過半数となっていて、（B保護者）は40%程度になっている。つまり、「規範意識」は学校で育てるべきこととして認識していることになる。勿論、どの課題についてもA～Dのいずれかで解決できるものではない。相互に連携協力して解決していくことではあるが、教師の責任や保護者・地域の責任であるとするよりも教育行政が主体的になって取り組むべき課題であると考えてもよい。教師や保護者などが行政に積極的に働きかけることも必要であろう。



## 参考資料等

中央教育審議会振興計画特別部会（第7回議事録）平成19年  
 経済協力開発機構（OECD）が2012年に行った国際的な学力調査「PISA」  
 経済協力開発機構（OECD）が2013年に実施した国際教員指導環境調査「TALIS」